

氏名	富井久義
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	博甲第8441号
学位授与年月日	平成30年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ボランティア活動におけるふるまいと認識についての 社会学的研究 —社会的意義と参加の論理の関係—
主査	筑波大学 教授 博士（社会学） 奥山敏雄
副査	筑波大学 教授 博士（人間科学） 土井隆義
副査	筑波大学 准教授 樽川典子
副査	上智大学 教授 博士（社会学） 藤村正之

論文の要旨

阪神・淡路大震災以降の日本社会においては、参加型市民社会やボランティア活動に高い社会的な評価が付与され、実践ではボランティア活動の制度化がみられるようになり、活動の日常的で継続的な展開のために担い手の不断の動員と、世代を超えた活動の継続が課題とされている。活動者たち個人レベルにおいてはボランティアに対する社会的な評価と、活動に参加し継続する動機にずれが生じる構図をもたらしがちである。ボランティア組織は、活動の内容と意義が対外的に周知されることで新しい活動者の動員が可能になるが、個々人の動機や個人にとっての活動の魅力はそれと食い違い、ボランティア活動者はその対処に直面することになる。

本論文では、あしなが育英会と森林ボランティアという2つを事例としてとりあげ、継続的に活動してきたなかで体験された上記のずれをどのようにとらえ調整しているか活動者の視点にたつて、長期的な参与観察にもとづき分析し、先行研究になかった視点からの分析を展開している。

本論文は、2部6章で構成されている。

序論では、ボランティア活動の社会的な意義と、それに対する参加者の認識に注目しつつ先行研究の整理が行われる。活動の社会的な意義と活動者の参加の論理という二重性が存在することが指摘され、活動者がその二重性をどのようにとらえて、折り合いをつけているかに焦点を当てる重要性が論じられる。そのうえで、ボランティア・アクションを贈与行為としてとらえる視角が設定され、さらに、活動者の相互作用をとらえる役割理論としてゴッフマンの理論とカウフマンの議論を援用したうえで、活動者自身による調整をふるまいの水準と認識の水準に区分して分析する分析枠組みが新たに提示され、その中核概念として、役割距離概念と相補的または対抗的な意味づけ概念が検討される。

序論に続く第1部では、あしなが運動をとりあげ、運動における関係規定の構図との折り合いがあ

きらかにされた。親と死別した遺児を対象とした奨学金団体あしなが育英会は奨学金の基金を募る街頭募金への参加を奨学生に義務づけ、遺児家庭の窮状を訴える活動を展開している。これをあしなが運動と呼び、活動をめぐる諸アクターの贈与関係が明示的に規定される点に特徴がある。第1章では、あしなが運動の活動体による関係規定の構図を整理し、運動に参加をうながすため学生を「運動の主体」と位置づける論理がみいだされること、この論理の中核は、寄付＝奨学金を贈与として受けとることを起点に、寄付者に象徴される社会への「恩返し」思想であると分析された。第2章では、「恩返し」の思想にもとづいて活動体が、寄付者とのあいだに設定する贈与関係にたいして、異なる交換関係や媒介関係をとらえることで贈与関係のアクターに位置づくことで生まれる負荷を回避しつつ活動にとりくむことが分析される。第3章では、運動の論理を体現する他の遺児学生を媒介とした調整のしかたが分析され、運動の論理に共鳴して活動にとりくむ他の遺児学生をみいだして自身の周辺の位置を確保し、ふるまいの水準では期待される役割に徹し認識の水準では役割距離をとる、遺児学生の活動参加の論理があきらかにされた。2、3章ではボランティア活動は、非日常的な面で行動を喚起する社会的意義をめぐる議論によってのみ成り立つのではなく、活動者自身の相補的な意味づけによっても成り立つと主張されている。

第2部では個別の活動者の関心や認識の多様性が尊重される鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動がとりあげられ、活動にむけられる社会的な期待を参加者がいかに扱っているかが検討される。この活動は、活動体による関係規定の構図が明示的ではなく、贈与行為か否かについても多様な参加者たちのあいだで見解がわかれている。第4章では、森林ボランティア活動団体ネットワークの機関紙にみられる安全管理をめぐる論理の変遷をとりあげ、安全管理は社会的認知が高まるにつれ、リスクの最小化にむけた制度的対応という観点で評価されるようになるが、安全管理を、自身の身体を媒介にフィールドの自然と個別に関係を結ぶ楽しさと不可分なものとしてとらえるみかたが活動者の底流にあることを解明した。第5章では、鳩ノ巣フィールドで共有される、作業方法の統一というふるまいの水準における明示的な規則のはたらきが検討され、認識の水準では活動者が自身の個別の関心を実現していく過程であったことが示された。第6章では、活動にむけられる社会的意義についてではなく、自身が活動にとり組む意味を語る認識の水準で共有される非明示的な規則のもつはたらきが検討され、不特定多数の都市住民を、自然との関係に根差ざした個々の内的な動機づけにもとづく活動に導くことが明らかにされた。第2部の考察をつうじて、ボランティア活動を社会との関係で評価する従来のみかたが、活動者がみいだす特有の意味をとらえそこねるという知見が導きだされている。活動者にとって、相対する自然が活動の対象であり、自身が主体となって自然との関係をいかに形成するかについて、主要な動機の語彙として語ろうとしていたことの重要性が述べられた。

結論では、ボランティア活動が、社会的な影響をとらえて活動を喚起する社会の論理と、経験にもとづく「自発的な」動機づけを模索する参加者の論理との二重性によって成り立っていると要約し、社会的活動者自身が実践において社会的意義をどのように扱っているのかを分析する方途を示した点に、本研究の意義があるという。そのうえで社会的意味づけにたいし活動者は、相補的または対抗的に意味づけをおこなっていると述べ、本研究を、社会にたいして「距離化」する態度が常態とされる現代社会において、「没頭」の契機を模索する姿勢をボランティア活動領域でとらえる研究として位置づけている。

審査の要旨

1 批評

ボランティアに関する社会学的な研究では、ボランティア活動を市民社会形成の契機とみる社会的意義を評価する議論にたいして、社会的意義と活動者の認識とのずれに注目する議論が出現している。社会的意義の過度な強調は、社会参加が国家による動員に転化する危険性があり、ゆえに活動の社会的意義と活動者の認識のずれが重要であるとみる議論が、代表のひとつである。その系譜に属する本研究の評価すべき特徴の一つは、ボランティア活動者自身に焦点をあて、社会的評価にたいする認識と実践でのふるまいの二重性をとらえたところにある。さらに、ふるまいの水準と認識の水準それぞれで、ずれの調整がおこなわれるダイナミズムを分析したことは高く評価される点である。そこでは一貫して贈与論の視角にたち、贈与の論理が作用する強弱によって関係規定が異なり、それが強い事例と緩やかな事例という一見大きな違いがある2つの事例について、長期にわたって参与観察と丁寧なインタビューをかさねたうで比較分析することにより、活動者の相補的あるいは対抗的な意味づけをあきらかにしている。その結果、活動者はいつでも離脱可能な境界的で流動的な立場を確保しつつ、単純に社会的評価に共鳴するのではなく、逆にそれらを完全に否定するのでもなく、認識の水準で距離をはかることでふるまいの水準では活動に没頭するという、二重性を適切に保つよう調整をはかって「自発的に」活動にとりくむダイナミズムが解明された。そうした活動者に固有な意味が「自発的な」参加の論理として創出されることによって、ふるまいの水準では社会的評価や期待に応え、社会的意義の実現に間接的には貢献することになる点があきらかにされたことは、社会的意義への共鳴を求める従来の社会運動論や市民社会論の想定とは大きく異なるものであり、活動の組織化にむけた新たな可能性が示されたものとして評価できる。

本論文が分析した募金活動、森林ボランティアいずれの事例も、活動の受け手個人との対面的で対称的な関係性がないものであるため、社会的評価や期待から距離をとりながら活動者自身の固有の意味をみだして参加するという論理があらわれやすいといえる。福祉分野のように活動の受け手と差しむかひの対称的な関係に立たされる場合、社会的評価のみならず受け手その人からの評価や期待にも直接さらされることになり、その場合にどのような調整がはかられていくのかを考えることをつうじて分析枠組みを発展させることにより、この研究の意義がいつそう高められることが期待される。

2 最終試験

平成30年1月10日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。